

旅と「発見」—西洋見立ての理想郷、江戸郊外の王子

白幡洋三郎

一、西洋の目に映った江戸郊外

幕末から明治初期、日本に在住する外国人たちが口を揃えて賛美し、うっとりした口調で語る場所があった。そんな賛美の対象となる代表地の一つが江戸郊外の王子であった。彼らはそこをどのように描写したか、またどうしてしばしば王子を口にしたのだろうか。遠く海外から長い旅の果てに来日し、西洋世界にとってはその当時もっとも未知の土地であった日本で、王子がどのようにして彼らの注目する地になっていったのか。まずは、西洋人たちの語り口のいくつかを聞いてみよう。

九月二十八日、われわれは江戸の北西部にある王子 Oishi と

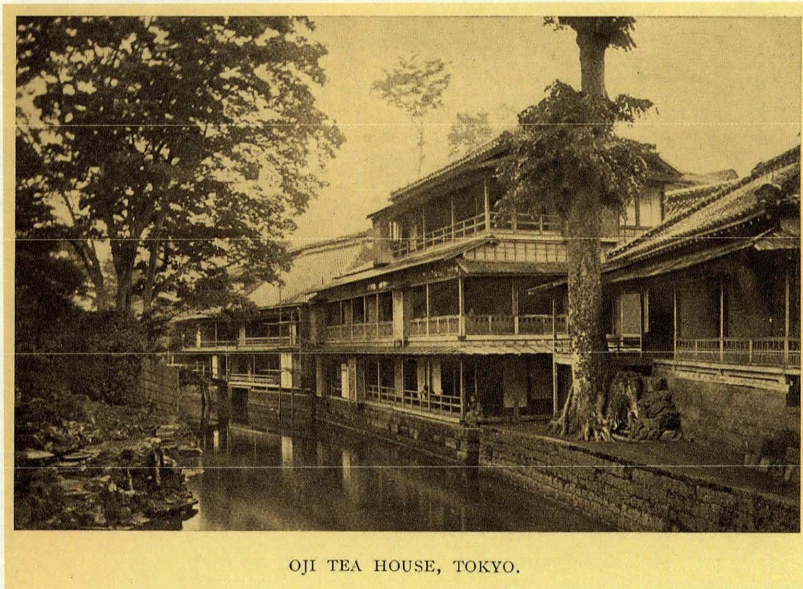
う村へ遠乗りをした。ここは粹な茶店のある格好な行楽地である。

（一八六〇年の記事。フリードリッヒ・ツー・オイレンブルク『日本遠征記』上、中井晶夫訳、新異国叢書、雄松堂書店、一九六九年）¹

江戸北方の近郊の中で、実益と愉楽、また、神聖と俗事、これらをもっとも高度に結び付いているのは王子の庭園であつて、庶民に愛好されている。

（一八六三年の記事。エメ・アンベール『幕末日本図絵』下、高橋邦太郎訳、新異国叢書、雄松堂書店、一九七〇年）²

首都の北部は飛鳥山のような遊びの公園や、パリ周辺の散歩道を思い出させる小さな村が続いている。江戸に滞在してい

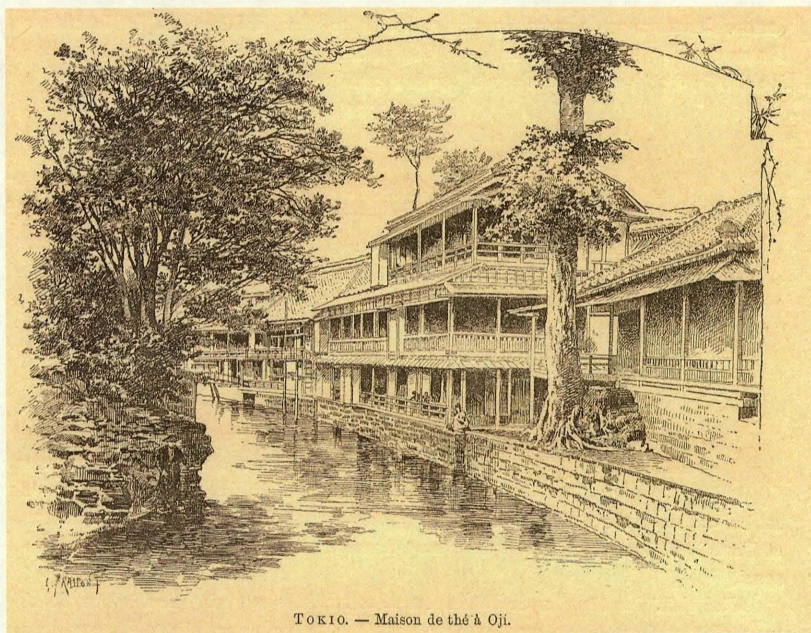


OJI TEA HOUSE, TOKYO.

図1 「王子の茶屋」と題され、掲載された写真。著者は幕末の1867年から日本に滞在しているが、この写真は明治期のおみやげ写真を購入したものと考えられる。

(Ed. by Captain F. Brinkley, *Japan*, vol.2, J. M. B. Millet Company, 1898 より)

(国際日本文化研究センター蔵、以下同)



TOKIO. — Maison de thé à Oji.

図2 王子の茶屋・扇屋付近の風景。1886年、著者が日本滞在時に購入した写真(図1と同じ写真、手彩色か)をもとに版画に彫ったものと考えられる。

(Paul Bonnetain, *L'Extreme Orient: le monde pittoresque et monumental*, 1887 より)



図3 外国人向けおみやげ写真（手彩色）の王子・扇屋付近。1870年以前の撮影と思われる。

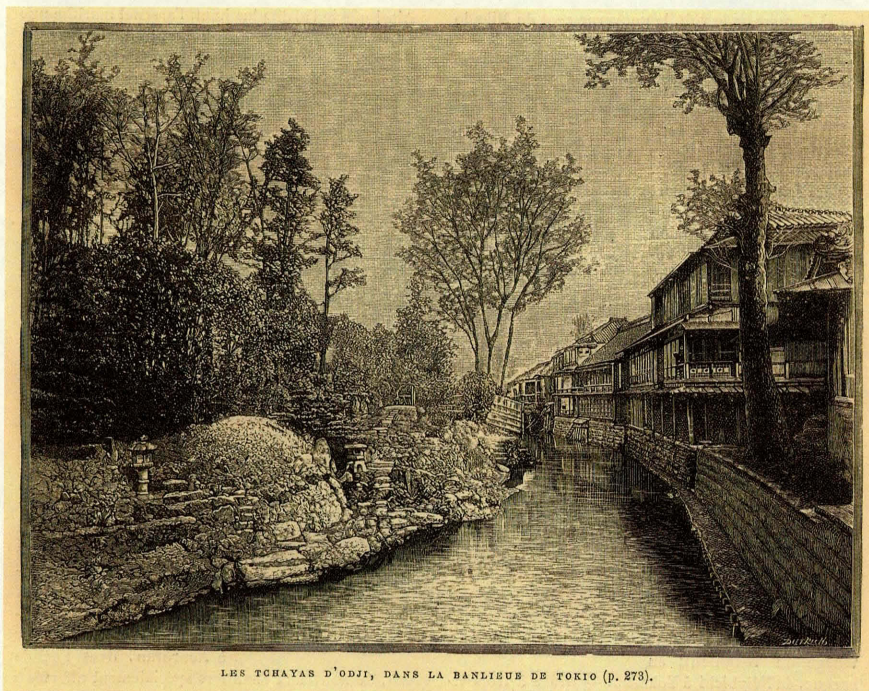


図4 「東京郊外、王子の茶屋」と題された版画挿絵（写真から作成したと思われる）
Les tchayas d'Odji, dans la banlieue de Tokio (I. Eggermont, *Voyage autour du globe. Japon*, 1900 より)



図5 図1と同じ写真と思われる外国人向けおみやげ写真(手彩色)の王子・扇屋付近。

る全てのヨーロッパ人は、風景の美しさでこれらの村の中
も一番の『王子』を訪れたものである。

(一八六〇年代初頭の記事。ルドルフ・リンダウ『スイス領事の見
幕末日本』森本英夫訳、新人物往来社、一九八六年)³

スイス領事のリンダウが語る江戸北部の郊外は、パリ周辺の村
々に似た気持ちのよい小さな集落がある。そして、その中でも群
を抜く風景の美しさを備えているのが王子であるという。以上、
取り上げた記録は幕末、まだ徳川の支配下にあった時代の叙述で
ある。素晴らしい自然と遊樂の装置を備えた場所、古きよき美し
き日本の代表が王子である、といった叙述になっている。

こうした郊外のどかな姿は幕末の混乱を経て消滅してしまっ
たのだろうか。そうではなく、江戸郊外の心地よく風景の美しい
村々はその姿をちゃんと維持していたらしく、上に挙げたような
筆の運びは明治に入ってもまだ続いていた。

翌日は学校が休みだったので、東京の北のはずれの王子とい
う美しい郊外の静かな場所へ遠足することになった。

(一八七一年の記事。ウィリアム・E・グリフィス『明治日本体験記』

山下英一訳、平凡社、一九八四年)

このような記述からうかがえるように幕末から明治初めにかけて、西洋人たちにとって王子は最高の行楽地、あこがれの地だった。王子を語った文章のうちで、簡潔にして最も印象深いものが次に掲げるものであろう。

王子は、言わば、日本のリッチモンド「ロンドン西郊の住宅地」で、そこにはイギリスの「スター・アンド・ガーター・ホテル」に匹敵する有名な茶屋がある。ここは江戸の善良な市民達が一日の遊樂や氣晴らしに来る所で、たしかにこれ以上の娛樂場を探すのはむずかしいだろう。

（一八六〇年の記事。ロバート・フォーチュン『江戸と北京 英國園芸学者の極東紀行』三宅馨訳、廣川書店、一九六九年）

スコットランド生まれの英國園芸学者ロバート・フォーチュンは王子をロンドン郊外の閑静な行楽地に見立て、そこにある茶屋をイギリスの上質なホテルと比較した。本書は、英國人以外にもかなりの読者を得て、日本についての大事な情報源の一つになったものである。ここに見られる簡潔な見立て表現によって、少なくとも英國人にとって王子は、遠く神秘のヴェールにつつまれた日本にありながら、具体的なイメージが描ける「身近」な場所になったのである。

「日本のリッチモンド」。この愛称を得た王子は、幕末・明治初期に外國人にとって最も有名な日本の土地の一つになった。

二、西洋見立ての幕末・明治日本

王子を閑静な住宅街であり、行楽地であるのみた英國人の目には、王子の心地よい茶店は高級ホテルのスター・アンド・ガーターに匹敵するものだった。

一八五九年、駐日英國公使として来日したラザフォード・オーロコックは大坂を訪れて、「日本のベネチア」と称した。

すくなくとも一〇〇の橋がいたるところでこのさまざまの水流にかかっている。そして多くの橋は、非常に幅が広く、金をたくさんつぎ込んで作つてある。

（オーロコック『大君の都』山口光朝訳、岩波書店、一九六二年）

これは水路網や架橋の充実ぶりなどを見て、都市の豊かさ、形態や機能が似ている点を表現したにすぎないと受け取るべきではない。英國人にとって西洋文明のふるさとイタリアにある、あこがれの文化・芸術都市に見立てた誉め言葉、西洋文明の視点から見ても最高の賛辞と考えるべきだろう。

また、山形の都市とその郊外（米沢盆地）を指して、「エデンの園」「アジアのアルカディア（桃源郷）」と称したイザベラ・バードのような人もいる。

米沢平野は、南に繁栄する米沢の町があり、まったくエデンの園である。「鋤で耕したというより鉛筆で描いたように」美しい。（中略）実り豊かに微笑する大地であり、アジアのアルカディア（桃源郷）である。

（一八七八年の記事。イザベラ・バード『日本奥地紀行』高梨健吉訳、平凡社、一九七三年）

西洋人にとって、日本は未知の国、知られざる神秘の国、そして旅の大秘境であった。幕末の時代は間違いなくそうであった。そうなるとその未知で神秘の国を訪れることができた僥倖の人物は、この国を訪れたことがない圧倒的多数の人々（本国人）に向けてどうしても簡潔な説明をする必要に迫られる。そこから生まれたのが見立て表現であった。自国あるいは世界的に有名な地名を使って、日本の場所について一挙にイメージをつかんでもらおうという手法である。長らく国を閉ざしていた日本は、長らく未知であったせいもあって、こうした見立て手法で説明される場所も少なくなかったのである。

富士山は、テネリフェ島（現スペイン領）のテイデ山にたとえられることがよくあった。テネリフェ島は、イギリスやオランダなど北ヨーロッパから喜望峰経由で東洋に到る航路の要所で、停泊する船も多かった。テイデ島はコニーデ形の火山であり、標高も富士山とほぼ同じである。そこで、日本に到着した西洋人旅行者は富士山を目にしたとき、長い航海を振り返って、テイデ山を思い出したのであろう。

別の見立て表現の例を挙げてみよう。日本政府の法律顧問として招聘されたフランス人ジョルジュ・ブスケは、日光を西洋の廟にたとえた。

私は今年、昔の将軍のために建てられた優れたモニュメントの数々を見に行こうとしていた。日光は日本のサンドウニカパンテオンだからである。ここに、芸術の努力が見事な自然と一緒にあって、偉人たちのためにその遺体を守るに値する墓を作ったのである。

（一八七三年の記事、ジョルジュ・ブスケ『日本見聞記―フランス人の見た明治初年の日本』野田良之訳・久野桂一郎訳、みすず書房、一九七七年）

サンドウニは聖人を記念して建てられた修道院、パンテオンは

偉人の墓所であり、共にパリの名所である。將軍の靈廟である日光をパリの聖堂にたとえたブスケは、大阪に旅したとき、ヴェネチアに見立て「大阪は東洋のヴェニスと呼ばれた」と記している。ブスケより十年以上も前に大阪を訪れたオールコックの『大君の都』を読んでいたのではないだろうか。

こうして日本各地が西洋の有名な場所に見立てられ、西洋人の想像力を刺激した。それは旅心を刺激したに違いない。一度誰かに「見立て」られた場所は、のちにそこを訪れる旅行者によって再確認され、「見立て」はさらに広まった。旅心はより一層高まっていったであろう。未知で神秘の国日本は、見立ての手法によってある面では了解され、ある面ではさらに神秘化された。

三、西洋の心をつかんだ王子——江戸のリッチモンド

王子は「日本のリッチモンド」にたとえられる西洋人たちの憧れの地になったが、それはいつ頃始まるのだろうか。すでに引用したいくつかの書物から、およそ一八六〇年代であると想定できるのだが、「日本のリッチモンド」という簡潔で明快な「見立て」の表現をみだしたのはロバート・フォーチュンである。彼はまた「有名な茶屋」に「スター・アンド・ガーター・ホテル」の名を提供したが、これは彼がはじめてだっただろうか。

じつはそれ以前に日本を訪れた英国の使節団エルギン卿一行の記録がそのさきがけであろう。団長のエルギン卿秘書であったローレンス・オリファントが描写する王子は、じつに美しく心地よい理想の郊外である。そしてそこに「スター・アンド・ガーター」と「リッチモンド」の名が現れる。日本人が王子でどのような過ごすかを詳しく書いた中に次のような叙述がある。

実際に、私の知ったかぎりでは、彼らはわれわれが、季節の終りをスタート・アンド・ガーターまたはハンプトン・コート（ロンドン郊外ハンプトンにある宮殿）へのピクニックで過ごすときのように振舞う。（中略）

（一八五八年の記事『エルギン卿随日使節録』岡田章雄訳、雄松堂書店、一九六八年）

引用が長くなるので、この前後の文章は注にまわすことにしよう。読者はこの文章に描かれる美しい幕末の王子に感動されることであろう。

おそらくこの書物を読んでいたフォーチュンの頭に「日本のリッチモンド」という表現が思い浮かんだのであろう。それはじつに見事な「見立て」であった。

王子は彼ら英国人のみならず、各国人が好む江戸の行楽地であっ



図6 1856年エルギン卿滞日時の王子、扇屋付近の風景（「江戸近郊の茶庭」と題されている）

Tea Gardens near Yedo (Laurence Oliphant, *Narrative of the Earl of Elgin's mission to China and Japan in the years 1857, '58, '59, Vol.2, 1859*)

たことは先に述べた。それぞれの記述をたどりながら、当時の西洋人の描いた王子にさらに思いを馳せてみよう。冒頭にも引用したプロイセンのオイレンブルク伯の『日本遠征記』から。

（中略）染井からわずかの騎行で王子に着いた。公使はここで朝食を予定していたのである。

扇家 *Fächerhaus* ——われわれの訪問した茶屋はそういう名前だった——は、小川のさらさら流れる所にあった。小川は狭い緑の谷間を人工の滝となつて落ちていた。家も茶亭も、半ばは水の上に突き出て建てられており、向い側には谷間の絶壁がけわしくそびえ立っている。坐っている所は、木蔭の涼しいさらさらと流れる水の上なのである、念入りに手入れされた庭園の横に茶屋がある。

（前掲『日本遠征記』）

フォーチュンが「スター・アンド・ガーター・ホテル」にたえた茶屋が「扇屋」である。こうした記述、旅心をそそる誘いの言葉の連鎖と、そこで用いられる見立ての記述によって江戸の郊外が、ただ単に郊外ではなく固有の名の王子として知られるようになる。ついそこにある西洋でいえばホテルに匹敵する有名なお茶屋、扇屋が知られるようになり、日本に旅した場合にぜひ訪れるべき訪問先としてイメージされるようになる。西洋人にとつ

て王子、扇屋は日本の名所以上の場、いかえれば世界名所になりつつあったのである。こうして各国人が王子を目指し、扇屋を目指したらしい。

明治三十一年（一八九八）一月二四日に初来日したイギリスの博物学者ゴードン・スミスは、一月四日にはもう扇屋を訪れている。長崎に日本到着の第一歩を印したスミスは、瀬戸内海を経て神戸・横浜の滞在のち二月三〇日に東京入り。そして年が明けて明治三二年早々に王子、扇屋を訪れているのである。

われわれは午後一二時三〇分に、すてきな場所オオギヤに到着した。ここでパン、ソーダ水、それにコールド・チキンをと、その他に日本の食べ物も食べた。私は、われわれを楽しませ、世話を焼いてくれ、シャミセンを弾いてくれるゲイシャを二人、呼びにやった。彼女らのすることすべてが私をすつかり満足させた。

『ゴードン・スミスのニッポン仰天日記』荒俣宏、大橋悦子訳、小学館、一九九三

著者スミスが感じた心地よさは芸者さんのもてなしのせいでもあったが、周囲の風景のすばらしさゆえでもあった。彼はこの記述に添えて扇屋を撮影した美しい彩色写真を添えている。扇屋付

近の風景は筆に語らせるよりむしろ写真に任せたといえようか。

スミスの訪問をさかのぼること四〇年近く以前、幕末に訪れたプロイセン遠征隊のオイレンブルクの記述をもう一度振り返ってみよう。オイレンブルクたちにとって王子はたんなる景勝地ではない。すぐ近くの丘陵、飛鳥山の名も挙げられている。そこは自然の中に人々の楽しみと暮らしがちりばめられている郊外である。おいしい朝食がとれる生活の場である。

朝食の後、われわれは飛鳥山 Askayama へ散歩にかけた。

そこはほど遠くない丘陵の一つで、かつては大君の狩猟の館が建てられていたという。だから今日でも、ここには徒歩でしか入ってはならないとされている。この丘の背は平坦で耕作されており、傾斜面には高い針葉樹が鬱蒼とした草藪の中から生えている。今日でもなお、大君は毎年ここに鴨猟にやってくる。ここからの眺望は、江戸の北部、大川の流れる肥沃な平野をおさめている。この丘の西の縁には、密生した木立の中に簡素な神殿「王子稲荷」があり、その基部は背後の谷間にかかっている。ここには、木に覆われた岩壁から清冽な泉が流れ、流れの中の石像を洗っている。

（前掲『日本遠征記』）

楽しい朝食がとれるだけではなく、そこは眺望の美しい遊樂の場である。そして「肥沃な平野」で農耕が行われる生産の場でもある。さらにそこは「神殿」や「石像」などの文化財も各所に見られる。まさにただ自然に恵まれただけではない、人の快適な暮らし全体を支えてくれる「郊外」なのである。

一八六〇年代は西洋諸国が都市改造に取り組んでいた時期である。一八四〇年代から五〇年代にかけて、劣悪な住環境に悩まされていた西洋の都市は、その解決に向けて動き出しはじめた。ちょうどそのころ日本が開国したのである。そして外国人が訪れはじめ、彼らが目にしたのが日本の都市と自然、とくに大都市江戸の郊外であった。遠い旅路のはてに見出した心地よい郊外。彼ら西洋人による日本の発見である。江戸は西洋人にとっての理想の都市にも見え始めたのである。

四、郊外の「先進国」、日本「発見」

西洋人たちは王子の景色を愛で、茶屋で食事を楽しみ、飛鳥山に遊んだ。大がかりな準備が必要な旅ではなく、気楽な日帰りの行楽である。朝住まいを出て、夕方には戻る近郊への楽しい外出。その目的地は「郊外」である。

英語圏の人々はこうした行動を *outing* や *picnick* などと呼んだ

が、そうした「外出文化」とでも名付けるべき行動は、西洋では一九世紀の後半になって生まれてきた新風俗であった。西洋世界は都市内部の家屋の中や石畳の街路上での暮らしを超えて、ようやく都市の外、郊外へ目を向け始めたのである。印象派マネの《草上の昼食》(一八六三)やモネの《日傘をさす婦人》(一八七五)、スーラの《グランド・ジャット島の日曜日の午後》(一八八四—一八八六)などの絵画に見られるような、屋外の新風俗を描いた絵画作品がこの時期につきつぎと現れるのはそのせいである。

もちろん西洋にもこれ以前から屋外の楽しみはあった。けれども江戸時代後期の時点で考えると、日本の「外出文化」はその大衆性、多様性において群を抜いていた。江戸郊外の王子付近だけを例にとっても、飛鳥山の花見や滝野川の紅葉狩りといった屋外の楽しみは、一部上流階層だけのものではなく、きわめて大衆的なものだった。花見や紅葉狩りの浮世絵が多数板行され、また煙草盆や弁当・重箱などの携帯用具が各種残されていることも大衆性の証である。

京都では、室町時代にすでに桜の時期に着る花見小袖があらわれるほど花見は春の行事として広まっていたし、江戸においても徳川前期には俳諧や川柳に詠まれるほどに大衆化していた。

季節に応じた年中行事に屋外行動が多いのが日本の特徴である。その中には純粹な宗教行事もあったが、寺社への参詣はほとんど

が同時に花や自然を愛でる楽しみと結びついていた。外出行動のきっかけに参詣という宗教的意味づけがあるにしても、その上に花鳥を愛で、名物を食すなど飲食の楽しみが付加されるのが当たり前になっていた。都市民は都市周辺部すなわち「郊外」を精神的、身体的遊樂の地としてつくりあげていたのである。

郊外は市街地を取り囲む農産物の供給地だけでなく、また都市労働の人材補給地だけでもなく、都市民の保養・遊興の地となっていた。都市周縁部への楽しい外出を江戸時代の人々は「遊山」と総称したが、王子は江戸市民にとって遊山の地の一つであり、美しい郊外を代表する地だったのである。江戸中期には京・大坂・江戸の三都が並び立ち、それぞれ郊外を発達させ、また各地の城下町でもそれぞれ周辺部の郊外地が開発されていた。日本はすでに一八世紀に郊外生活を成立させた郊外の先進国だったのである。都市生活の反省から、ようやく一九世紀の半ばに郊外へ目を向け始めた西洋諸国に日本が一つのモデルとして紹介され始めた。自分たちが最近になって注目し始めた郊外を、はるか以前から育て、使いこなしている日本。それまでは情報が乏しく、神秘のベールに包まれた未知の国のイメージだけが強かった日本は、都市と自然をうまく調和させた理想的な郊外の先進国として認識され始める。来日した西洋各国人の日本見聞記録は、本国における郊外への関心をより強く刺激したのであろう。それは未知の国、神秘の

国、不思議の国である日本の「発見」、旅先としての日本「発見」の一面である。開国初期から頻繁に取り上げられた王子は、旅先としての日本「発見」を刺激し、日本を印象づける一つの、しかし大きなきっかけとなったのである。

注

- 1 この文章のあとに、王子・飛鳥山についての描写が長く続く。そのうちの部分を本文で引用している。
- 2 この文章にも次のような、王子・飛鳥山への親しみあふれる描写が続く。

「……これは山の峡谷の入口にあり、小さな川が滝となって流れ出して、谷の中を優雅に蛇行している。この清い流れの上に、茶屋の離れや回廊がずっと続いて建っている。水の清涼さと、建物を取り巻いた大木の緑陰を共に満喫できる所である。客間や、縁側や、畳や、障子は輝くばかり清潔に手入れがされているし、客扱いも際立って淑やかで、しかも、質朴である。

このあたりには、方々に歴史的な思い出がある。将軍家の狩猟のときの城館が、昔、この近くの丘の上にあった。そこから、隅田川が潤している広い田畑が見渡せた。やや離れた小さな谷の中に、徳川家の祖先の家康を祀った神社があり、また、高い岩壁から奇蹟的な泉が一条落ちてくる。この泉には、石が祀られてある。王子の旅館の客たちはこの石像

に願をかけに来て、酒を飲み、興奮して自然のシャワーの心地よい効果を味わおうと滝壺に立つのである。

野原の小部落には店が何軒もあり、露店も出ていて、地方色の豊かな玩具や骨董品を並べて、顧客や子供たちに売っている。というわけは、中流の家庭では、物見遊山に行った以上、田舎で売っている土産を何か買って帰らなければ、行ったことにはならない、と思いつ込んでいるからである。だが、そうしたことは二義的な関心事にすぎない。

王子の庭園がもつ人気の秘密は、それらが古代から、稲作の守護神である稲荷大明神と共に、その使姫となっている、神聖な動物のおかげを蒙っているためである。お狐様 *messire Kitsune* は特別にこの土地に恩恵を授けているので、王子稲荷と名づけた、この丘に祀って崇めている。

一月の十七日、寺には多数の田舎の人や町の人が入り混じって大勢集まって来る。この人たちはそこに絵馬を吊り下げたり、新年の供物を奉納しに来る。……」

(エメ・アンペール『幕末日本図絵』高橋邦太郎訳、新異国叢書、雄松堂書店、一九七〇年)

3 同様に引用以下の文章を少し掲げておく。各国の西洋人が王子・飛鳥山を気持ちのいい行楽地と見ていたことがよくうかがえる。

「……それは水の澄んだ小川の近くにある、眺めのよい丘を背にしている。美しい季節には町人の家族がよく古木の蔭や、そこに沢山ある茶屋で休む。耳障りな音楽を聞きながら、簡単な食事をとり、こんな無邪気

な楽しみに幸せを感じているようである。滅多にしかないが、口争いや喧嘩が彼等の集いの静かさを乱す。そして外国人にはこの微笑ましい風習が気に入らざるを得ないのである。」

(ルドルフ・リンダウ『スイス領事の見た幕末日本』森本英夫訳、新人物往来社、一九八六年)

4 全権委任状の交換の翌日に、エルギン卿が田舎に散策に出かける準備が委員たちによって整えられていた。目的地は王子 Hoje という、十マイルほど離れた夏の行楽地で、美しい景色や植物園、また設備の整った茶屋が呼び物になっていた。(中略)

われわれは、路傍の庭園や田舎家で行われている雅致をきわめた趣味を見て、驚嘆と喜びに満たされた。イギリスの模範地区でも、江戸の郊外を飾っているこのような「飾られた小舎」*collages one/ves* を作ることはできない。われわれは、細かい点でいつも欠けている。(中略)

われわれが足を止めて休んだ茶屋は、苔の生(む)した洞穴からきらめく水が吹き出している庭園の中にあつた。詰め物をした畳(マット)が休息を誘った。ここで美しい娘たちが煙管と茶をすすめ、また未熟の梨を受け取ることを強いた。この茶屋から先で、われわれは田園の美を味わった。ちょうどロンドンの郊外を離れて、デボンシャの小径に分け入ったのである。(中略)

最後にわれわれは、にわかには峡谷に下って行ったが、そこには見事な村が森に包まれて横たわっていた。その村は、数件の田舎家と規模の大

きな茶屋とから成り立っていた。その茶屋の入り口のとこで馬から降りて、物珍しさに集って来た全村の人々を大いに感動させた。茶屋は音高く流れている水流に臨み、二階の部屋の縁側は水の上にかかっていた。川が絵のような滝となつて構内に流れ込んでいる地点で、斜面を覆う木立や、岩石をあらしい雅致に富んだ庭や、奇妙な形に刈られたイチイの木がその岸を縁どつていた。われわれは、突出した地点に設けられ、四周のすばらしい眺望を集めている四阿に陣取り、注文をとることを口実にわれわれを見に来た娘たちの一団に対して、昼食を整えてほしいと伝えた。（中略）

高位の人が、夫人や家族を連れてこの種の家庭的な接待を受けたいと望むときには、まず茶屋の経営者にその意図を知らせておけば、上品な私的な営みが彼のために確保されるのである。ここで、彼とその一行は、人目を避けてこの種の保養に許されるかぎりの楽しみを満喫する。夫人たちは彼らのために、楽を奏し、舞い、または唄う。（中略）

王子を離れ、われわれは馬で村の背後の丘（飛鳥山）の突端に登った。ここに出るためには、街道から分かれ、馬を走らせて、公園風の美しい樹々が点在している緑の芝生を横切つて行かなければならなかった。この突然の気まぐれな行動にあわてた付添人たちは息を切らして後を追いかけて、激しく抗議し、われわれの違反行為が、彼らにとつては即決の処罰を招くことになるだろうという意味を表わして、手でのどをこすった。けれども高いところから眺めて見たいというわれわれの好奇心は、彼ら

のために遠慮をする気持ちに打ち勝った。確かに人情を欠いただけのことであつた。われわれの目を楽しませた眺望は、他のどんな場所で見ただけの色よりも、リッチモンド・ヒル Richmond Hill（リッチモンドはロンドン近郊の町。テムズ河右岸の景勝地）からの眺めによく似ていた。眼下には、うねつて流れる川があり、ときには深い森に隠れ、ときには草原に姿を現わして広大な陽光に照り映えた。その彼方には、はるか視界の及ぶかぎり、田園は豊かに耕され、美しい変化を示し、あちこちに町や茅屋の煙が眺望に生氣を添えていた。

〔「エルギン卿随日使節録」岡田章雄訳、雄松堂書店、一九六八年）

〔本稿をもとに執筆した論考「西洋見立ての理想郷、王子・飛鳥山」を北区飛鳥山博物館（東京）編図録『江戸のリッチモンド あこがれの王子・飛鳥山展』（二〇〇五年）に掲載している。〕